

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行
(財)第五福竜丸平和協会
〒136 東京都江東区
夢の島3-2
都立第五福竜丸展示館内
電話 03-3521-8494

チェルノブイリ事故から十年目の春がやってきた。十年前にウクライナの原発が爆発し、世界中が放射能の恐怖に包まれた時、多くの人が、もうこの恐怖はゴメンだ、原発がこの地上からなくなっほしい、と心から思った。

それから十年、あのときの気持ちはどこに行ったのだろうか。折しも私たちは、最近、阪神淡路大震災やもんじゅ事故など、日本でも原発の危険性について真剣に考えるべき大きな出来事を経験した。その意味からも、チェルノブイリ十年の教訓を振り返ってみるよい機会だろう。

チェルノブイリ事故の後、イタリアで国民投票があり原発廃止が決められるなど、世界各国で、原子力問題が政治の中心的課題となった。その結果、脱原発が、イデオロギーを超えた大きな流れとなった。日本でも、一九八〇年代後半には反原発運動が盛り上がり、原子力問題が国民的な関心事となったが、その後、チェルノブイリは忘れ去られ、原発や放射性廃棄物の問題は、それらの施設を抱えた地域だけの問題になってしまった感があつた。しかし、チェルノブイリは、決して過去の出来事ではなく、また、「よその国のこと」と済ませられることでもない。

チェルノブイリ事故による、小児甲状腺がんや白血病などの放射線障害の大きさが伝えられる。日本の全土の面積にも匹敵するような、環境放射能汚染の気の遠くなるような広がり、崩壊寸前の石棺（事故炉を封じ込めた建物）の状況など、今なお残る事故の後遺症の深刻さは、眼をおおいたくなるほどだが、あえて言えば、今数字の上に現れていることなど、被害の全貌の一部分

「チェルノブイリ」を共有しよう

高木 仁三郎

にも満たないだろう。

チェルノブイリに限らず、廃棄物問題など数多くの未知数を抱えたまま、人類が原発を動かし続けるというのは、地球やその将来の世代に対してなんとも傲慢なことではないか。日本でも、最近、福井県など多くの原子力施設を抱えた地域から政府の原子力政策を問い直す大きな声が挙がり、新潟県の巻町では、原発建設の是非をめぐって、八月四日に日本初の住民投票が行われることになった。しかし、私たち一人一人の命に直接かわることだと言っているのに、全国的に見れば、まだまだ関心

は低い。

原発や「もんじゅ」など日本のプルトニウム政策にかかわる問題を、施設を抱えた地域の問題として放っておくべきではない。これは、私たちの使う電気やそのゴミの問題であり、日本中であらう一度議論の渦が巻き起こってほしいと思う。そして、そのためには、わたしは、今テレビを通して伝えられるチェルノブイリのあの子どもたちの状況を、日本のすべての人々が、自分たち自身の問題として、共有してほしいと思う。（原子力資料情報室代表）



展示館前の広場で国民平和進行出発集会

広島へ平和進行出発——大石又七氏が激励あいさつ

核兵器のない二十一世紀をきりひらこう——。五月六日、五月晴れの第五福竜丸展示館前から広島へ、今年も平和進行が出発しました。原水爆禁止世界大会実行委員会が提唱し、日本原水協など進行実行委員会が主催する「96核兵器廃絶国民平和進行」の出発集会には、色とりどりの団体の旗、のぼり、横断幕をかがけて、約千名の参加者が集まりました。井上美代新日本婦人の会会長、河井智康世界大会運営委員会代表の挨拶のあと、日本原水爆被害者団体協議会、

大石さんは「四十年前の第五福竜丸事件は核兵器の恐ろしさ、死の灰の恐ろしさをはっきりと世界に示しました。しかし今では大量の核兵器が世界に配備され、いつのまにか日本人の多くもアメリカの核兵器の傘を容認するようになってきました。核兵器を廃絶したいと思っています。核兵器をなくすことを被爆者の願いです。いま土に眠る広島・

日本山妙法寺の平和行脚、市民団体の平和行進も

国民平和進行に先立って、六日前、日本山妙法寺の「96年平和祈念行脚」が、展示館前を出発集会をもち、南無妙法蓮華經と大書された紫紺の旗幟を潮風になびかせ、うちわ太鼓をうちならし四十名余の僧侶が集いました。武田、木津上人はじめ広島まで行脚する

長崎の被爆者の願いを皆さんは足の裏からも吸い取り、エネルギーとし、核兵器廃絶の運動を」とよびかけ参加者を励ました。海外からのメッセー、広島・長崎両市長、沖繩はじめ各地各界からのメッセー、各コースを歩き通す進行者の紹介、決意表明に連帯の拍手を送り、「被爆者の国家補償を！世界の核実験被害者と連帯しよう。核実験全面禁止条約の締結を！核兵器全面禁止・廃絶の国際条約をむすべ」などスローガンを唱和し、沿道に「あなたもともに歩きましょう」と訴え力強く出発しました。

出発集会の関連行事として「大石又七氏を囲んで第五福竜丸を語る会」が展示館で開かれ、またオーブン・メーキングとして、伊是名名の会の琉球舞踊、梅原司平さんのフォークソングの演奏が行われました。

岩手県から二十二年の中学校

「第五福竜丸は私の一生忘れられない船となりました。すばらしい修学旅行にしていたいてありがとうございます」——さわやかな笑顔で中学生が大石又七氏の手をにぎりました。岩手県平泉中学校三年生一三七名は展示館の床に座り込んで大石さんの語る被爆体験に耳を傾けました。下閉伊郡釜津田中学校三年生十名は、強い希望で船の甲板にたつて、死の灰の降り注いだ状況を想像し、被爆体験を共有しました。その様子は「たつた一〇名の修学旅行」という岩手放送テレビの特集番組となって放送もされました。四月、修学旅行で来館した中学校は四十



大石又七氏の話聞く中学生

二校が、岩手県の中学校で福井、宮城、小岩手、多校が来館しました。

時代を超える人間性回復の訴え
——ラッセル・アインシュタイン宣言の背景と意義(3)——

小川 岩雄

ラッセル・アインシュタイン宣言が水爆の出現以後、いち早く核戦争の脅威を警告し、科学者に会議の開催を呼びかけた先駆的貢献は改めて強調するまでもない。

前号で述べたように、宣言は冷戦下の東西両陣営のいずれにも加担せず、全人類の立場で核兵器と戦争の廃絶を訴えた。

今や国家や国家ブロックの個別利害を超え、人類の一員としての共通の価値基準と要求に従うという「新しい考え方」への移行、つまり人間性の回復だけが相互間の敵意を解消し、信頼と和解をもたらして核戦争と破壊を免れさせる宣言は強調したのである。水爆という巨大な破壊力を備えた新兵器の出現が、こういう理想主義的な政策の現実的な有効性を裏付けることになったと言える。

しかし仮りに戦争の規模が小さく、核兵器が使われず、「人類の破壊」までは招かなくても、それ

は交戦国や戦闘地域の人々に耐え難い苦痛や不幸と損害をもたらすことは明らかであり、現代の国際社会では人道上許されない野蛮な行為であると言わねばなるまい。

こういう徹底した、日本国憲法の理念にも通じる戦争否定の立場に立てば、宣言が進めた戦争廃絶の論理は、「核戦争を誘発する恐れ」だけを根拠とする視野の狭い議論であるということになる。

むしろラッセル卿ら署名者はみん道人道的立場からすべての戦争を拒否する考えであらうから、宣言の文脈は「核戦争の回避」という一点に注意を集中させようとする主旨と理解すべきかも知れない。

冷戦の終結後、核兵器、とくに大破壊力の戦略核兵器の持つ軍事的価値は著しく低下した。一方民族紛争、局地戦争などの多発と、それらの地域への国連の名による諸外国の介入を通じて、通常兵器の相対的重要性が高まっている。

四十一年も前に宣言が「もし東西間の諸問題は、誰に対しても何らかの満足を与えらるるに解決すべきである」とすれば、これらの問題は戦争によって解決すべきではない」と説き、

「もしこの非軍事的解決の道を選ばなければ、私たちの行方には幸せや知識、そして英知の絶え間ない増進が期待できる。ところが私たちは、争いを忘れられないばかりに、死への道を選ぼうとするのであろうか」と問いかけた重い設問は、核戦争

誘発や冷戦との関連には関わりなく、時代を超えた切実さをもって私たちに迫ってくる。宣言が主張するところ、戦争の廃絶はまさに人間性回復の事業に他ならない。

そこで宣言は前号で引用した「あなたの人間性を心に留め、他のことはみな忘れてほしい」との要請を掲げるが、これは何という難問であらうか。よほどの聖人君子でない限り、誰でも忘れようとしても忘れられない無数のこだわりを抱えている。

湯川博士と共にバグウォッッシュ会議の熱心な推進者だった朝永振

一郎博士は生前、「他のこと」とは何かを深く考えた末、最も重要なのは「価値観を退ける狭い専門家的思考様式」であらうと結論された。(注)確かに米ソの軍備競争を招いた「冷徹な」核抑止論の背景には、そういう思考様式の支配が認められる。

しかしさらに立ち入って考えると、そういう思考様式を支え、促すことによって生活や地位、既得権益などを守ろうとする執着や勢力の存在が、人間性の回復を妨げる大きな障害の一つとなっていることを改めて痛感させられる。

とはいっても、戦後世界は確かに動いており、非同盟非核諸国の国際的発言力が増大し、各地の地域紛争も軍事的介入による解決は失敗に終わる場合が多く、宣言が求めた平和的解決の有効性が着々と実証され始めたこともまた事実である。宣言や日本国憲法の驚くべき先見性を再認識すべきではなからうか。

(注)バグウォッッシュ京都シンポジウム(一九七五年)での講演、「世界」一九七五年十二月号、朝永振一郎著作集5「科学者の社会的責任」(みすず書房、一九八二年)に収録。

(立教大学名誉教授・協会理事)

展示館にとどけたささやかな

行動の成果

上 伸子

三月三日、私たち新日本婦人会東京都本部は二〇〇人近い会員がつどい、第五福竜丸展示館を訪ね、彫金のレリーフ『花の精』(岡部昭代作)を船の台座にすえつけることができました。このレリーフは一九八六年三月に第五福

竜丸の保存修復のため、会員からあつめた募金を寄付し、また、永久保存を都に要請したことを記念し、第五福竜丸平和協会に贈ったものです。

以来十年、海に近いこの地の潮風をうけ、サビが出、黒ずんできました。作者の岡部先生も氣にかけておられ、「きれいにさせてほしい」と声をかけてくださったのを機に、十年目の今年、もちかえらせていただき、岡部先生の力でサビもとれ、元の金色のかがやきをとりもどし、再び、台座の定位にもどすことができました。だれでもできる平和への

行動として、とりくんできた一円玉募金がこうして使われていることを、会員ともども確認できうれしい一日でした。

この三月三日は、私たちにあって、じつは三十一回目の「3・3ひなまつり行動」の日でした。毎年三月三日にそのときどきの要求や運動をスローガンに「おひなさまも怒っている」と女性がたちあがって行動する日としてつづけてきているのです。この日は、夢の島もふくむ臨海部の開発をこの目でみて、この広大な所有地を都民のためにこそ使ってもらいたいと参加者一同、思いをあらたにした日でもありました。

昨年は、戦後五十年、被爆五十年、この節目の年に、世界から核兵器をなくすための大きな一歩がふみだせたらと、「ヒロシマ・ナガサキからのアピール署名」を目標を決め組織の基礎単位である班

がその目標を達成しようと運動をつよめました。国際的な世論が高まったにもかかわらず、中国、フランスが核実験を行い、核保有五ヶ国は、核不拡散条約で核兵器を保有しつづけるなど、核兵器廃絶はとおのいたようにみえました。

しかし、国内でも国外でも「核兵器そのものをなくす」ことが議題にのぼり、世論が核保有国やそれに追隨する国の政府をこれほどおいつめた年もなかったと思います。私自身、九月に北京でひらかれた第四回世界女性会議で、「核兵器のない世界をめざして」のワークショップを主催し①核兵器や核実験の被害者をもうこれ以上、けっしてけっしてうみださないこと②人がつくりだした凶器なら人の手でなくすこともできること③世界で初の被爆国の国民として、自国の政府にむけて、核廃絶の立場にたつてとせまること④世界の女性とこの点で共同できることを痛感しました。そして、今、そのために議論ではなく行動することが緊急に必要だと思えます。

昨年九月の沖縄での米軍による暴行事件を告発した一人の少女の勇気が、戦後五十年、あたりまえ

の風景だった米軍基地の存在そのものを問いなおす大きな世論の変化をつくりだしています。

米軍に日本の土地を提供しつづける日米安全保障条約はほんとうに必要なのだろうか。

沖縄だけがなぜこれほどの基地の重圧をうけなければならないのか、戦後五十年も経たのに二十世紀までに基地を縮小するプログラムさえ組めないのは何故かと沖縄県民はたちあがっています。私たちも、これは「基地あるがゆえの被害」、「女性や少女の人権も守れない日米安全保障条約って何?」と、女性の立場で、東京にある米軍基地と安保条約について考えはじめています。

「核も基地もない東京を」は、女性のねがいです。核廃絶のための運動の発端ともいえる第五福竜丸事件と、それを後世につたえる、東京での運動のメッカ、この展示館に一九九六年、ささやかな行動の成果をお届けすることができたことを喜んでいきます。

(新日本婦人の会
東京都本部会長)